



五感をフルに活用して診察することで、 おなかの異常の本質に迫る

評者 野々垣浩二 大同病院院長

医師の仕事は「Calling (天職)」と著者は語る。私たち医師は、自分の仕事を「天職」と自信をもって語ることができるだろうか？ 本書からは、著者の強い使命感と、「自分がやらなければならない」という強い覚悟が、ひしひしと伝わってくる。この本は、単なる診察マニュアルではなく、内科医としての著者自身の物語が込められた一冊である。

著者は、西洋医学と東洋医学を融合させて、診療を極めて丁寧に言語化している。宗教でも、医学でも、どちらが優れているかではなく、重要なのはバランスである。西洋医学と東洋医学のハイブリッドアプローチの価値を、この本を手にとれば誰しもが理解できるだろう。コロナ禍で医療者はかつてない経験をした。大切なことは、それを単なる「経験」で終わらせるのではなく、「どう行動変容につなげるか」である。著者は、COVID-19 後遺症で苦しむ患者の声に耳を傾け、東洋医学を自身の診療に取り入れた。その姿勢からは、医師としての柔軟性と深い共感性が伺える。

人間の身体は、「おなか」だけが独立して機能しているのではなく、すべての臓器が関係性の中でつながっている。「心」と「身体」も切り離せない。著者は五感をフルに活用して診察することで、おなかの異常の本質に迫る。その診療のなかで蓄積された暗黙知を、本書では見事に形式知化している。さらには、自身の消化管出血症例まで包み隠さず開示している。

この本は、研修医、内科医、そして消化器内科を専門にする医師にこそ手に取ってほしい一冊だ。多くの消化器内科医にとって、興味の中心は内視鏡診療である。内視鏡診療の有用性を否定はしないが、カメラを持つ前に、まずは患者に真摯に向き合い、五感をフルに活用してほしい。五感の感度を高めるには、本書から得られた身体診察の知見を、日々の診療の中で「修行」のように実践する姿勢が求められる。本書で学んだ身体診察のノウハウが、身体知として身についたとき、AI には代替できないスキルとなるだろう。なぜなら、そこには「医師としての心」が宿っているからである。

この書評を読んだだけでは不十分である。ぜひ、この本を手にとっていただき、自らの診療を見つめ直すきっかけとなることを願ってやまない。 **G**



《ジェネラリスト BOOKS》 集中講義! おなか の身体診察

フィジカル&腹診で
腹部症状に立ち向かえ

中野 弘康=著

定価: 4,950 円 (本体 4,500 円 + 税 10%)
A5・240 頁/医学書院/2025
[ISBN978-4-260-05786-8]